NPO 法人市民まちづくり会議・むさしの

令和 6 年 9 月 26 日

〒180-8777
武蔵野市緑町２－２－８
武蔵野市役所
策定委員会事務局
総合政策部企画調整課　御中
（SEC-Kikaku@city.musashino.lg.jp）

特定非営利活動法人
市民まちづくり会議・むさしの
理事長　　篠原 二三夫（公印略）

武蔵野市第六期長期計画・第二次調整計画策定に向けた意見交換会

いつもお世話になります。

掲題の件につき、ご提示いただいた「テーマ別論点集」に対し、次の通り、当会としての意見を申し上げます。

3― 今後の学校改築のあり方

＜意見を行うに当たっての前置き＞

（1）学校施設の整備運営体制について

- 武蔵野市は、昭和の時代から市民のニーズに適切に対応して、吉祥寺駅周辺の都市計画決定や市中心部へのゴミ焼却場の整備、細街路への路線バスの導入(ムーバス)、駅と商業施設周辺における路上駐輪対策、荷さばき車両の制御による歩いて楽しい商業地域の実現など、先進自治体としての取り組みを着実に進めてきた
- 現在も、「武蔵野プレイス（2011 開設）」や「地域包括ケア人材育成センター(同 2018)」、「むさしのエコ re（リ）ゾートとクリーンセンター（同 2020）」などには、全国の自治体や議会から多くの視察が訪れている（自治体別・視察の多い事業一覧 2023 東日本編、日経 BP 社）。これらの先進的な施設の特徴は、市民の要請に対して有効な役割を担うために、一つの課や係だけでは所管することのできない、多様な機能を有する複合的な施設となっている点である。
- 「地域包括ケア人材育成センター(運営は公益財団法人武蔵野市福祉公社)」は、健康福祉部内の複数の課が連携して取り組む複合施設であり、「むさしのエコ re（リ）ゾートとクリーンセンターは環境福祉部の環境政策課とごみ綜合対策課が連携して運営している。
- 特に「武蔵野プレイス（運営は公益財団法人武蔵野文化生涯学習事業団）」に関しては、「図書館（教育委員会・図書館）」と「生涯学習事業（教育委員会・生涯学習スポーツ課）」、

「市民活動支援事業（市民部・市民活動推進課）」、青少年活動支援事業（子ども家庭部・児童青少年課）」といった複数の部や課にまたがる多様な事業が展開されている本格的な複合施設であり、その魅力にひかれて年間延べ 140 万人を超える人々が訪れている。

- 市民からの要請が年々高度化、多様化する武蔵野市において、限られた財政、限られた公共用地を高度かつ効率的に利活用するうえでは、このような複合施設の整備は今後ますます重要な政策課題となる。
- ただし、このような複合施設の実現にあたっては、将来を見通せる専門的委員会における着実な議論とパブリックコメント等による市民からの支持や支援、そして市長と議会による指導体制が不可欠であり、縦割り構造の行政組織内部から具現化することはまず不可能と考える。

（2）学校教育を支える基盤とは

- 学校教育の実践の中心となるのは、教職員と児童生徒である。そのため、施設設計においては、この両者の意見を十分に聴取し、使いやすい施設、行くのが楽しくなる施設にするべきである。やもすると、学校建築物として表彰されることが高く評価されることがあるが、その裏で教育実践からみると使いにくい施設となっていることも少なくない。

（3）学校とコミュニティセンター

- 武蔵野市のコミュニティづくりの拠点はコミュニティセンター（以下コミセン）である。これらのコミセンの利用地域として想定されている範囲と小中学校の校区は、多くの場合一致していない。しかし、コミュニティ・スクールが武蔵野市においても順次導入される方向であり、文部科学省によって地域学校協働活動も推進されており、学校と地域との関係は今後ますます強くなっている見込である。コミュニティ側からみると、地域で育つ子どもたちにとって、コミセンは重要な地域施設である。

＜意見＞

（1）学校施設の建て替えについて

- 市民ニーズに対応し、あるいは先取りして、先進的な複合型公共施設整備を進めてきた武蔵野市において、これからの学校用地施設の統廃合や建て替え、運営に関して、従来の教育委員会教育企画課所管の枠内だけでの議論を進めることが、はたして適切なのであろうか。
- 武蔵野市の公立小中学校を取り巻く環境は、出生率の低下に伴う児童数の減少や、学費の公的負担に伴う小中学校からの私立校への進学など、楽観視できないものであり、さらに運営環境としても「学校の働き方改革も考慮した部活動改革の考え方（文科省通達 2019.3）」にある“休日の部活動の段階的な地域移行（学校部活動から地域部活動への移行）”など、教育行政だけでは対応しきれない将来課題が生じている。

- このような小中学校を取り巻く状況の変化を踏まえ、市民のニーズにも対応した 30 年先 50 年先の学校の在り方を考えた場合、学校を単に学校教育だけの施設にはせずに、例えばドイツに地域毎にある「スポーツシューレ」のような施設を学校と一体的に整備し、学校のクラブ活動の運営もより専門的な指導者に任せ、さらに卒業生でもある地域の高校生や大学生とともにスポーツや文化サークルなども楽しむことができる、複合的な教育・スポーツ施設にすることなども検討すべきではないだろうか。
- もちろん、学童生徒の安全性の確保は最重要課題であるため、学校エリアに部外者が入り込まない設計や運営体制の検討は必要となる。
- 一方で、武蔵野市においては 30 年後には 3 人に 1 人が高齢者になるため、行動圏が限られる高齢者のスポーツ（フレイル）施設として、また各コミュニティセンターとも連携したスポーツコミュニティの拠点としての役割など、市内 6 校の中学校と一体的に整備された市民スポーツ施設は、学校運営体制の変化に伴うクラブ活動の地域移行に対応した、より質の高い指導体制も含めて、市民に支持される有効な施設となる可能性は高い。
- 人口密度が高く広い公共用地の確保がほぼ不可能な武蔵野市においては、このような時代の要請を踏まえた複合施設を先駆的かつ積極的に検討していくべきであり、その実現にあたっては、首長と議会の時代を先取りした決断と、専門委員会による検討、市民の理解と支援、そして教育委員会・教育企画課、同・生涯学習スポーツ課、市民部・市民活動推進課等の連携体制が不可欠となる。
- この場合、当面の取り組みとしては生徒数の減少が避けられないであろう六中をモデルとしてこのような複合施設の在り方を検討実現し、微修正を図りつつ他の中学の建て替えに合わせて普及を進めることを検討すべきと考える。

（2）学校教育を支える基盤への着目

- 改築・改修や新築の場合は、アンケート調査、座談会、ワークショップなどあらゆる手法を用いたうえ、利用の中心となる教職員・児童生徒の意見やニーズを吸収し、その結果を的確に反映する設計とすべきである。

（3）学校をコミセンと共にコミュニティの中心に置く

- 今後の学校施設の再配置においては、できるだけ校区とコミセン利用地域の範囲を一致させていくよう努力すべきと考える。もちろん、校区もコミセンもこれまでの歴史の中で蓄積された地域範囲があり、とくにコミセンは大規模館のエリアの中に小規模館のエリアが含まれるなど入り組んでいる。その中で育まれてきた固有のコミュニティや学校・地域関係を大切にすることは言うまでもない。そのため、現状を踏まえながら、よりよい学校と地域との関係を模索しながら校区の再検討も行っていくことが重要だと考える。

4― 吉祥寺イーストのまちづくり

（1）駐輪場配置のあり方

- 吉祥寺東部地区の街づくりの準備に着手すること、駐輪場を近くに整備することが市長の公約であることについて、意見する。
- 先に、駐輪場を近くに整備することについての課題をみると、そもそも駅近に整備するという市長の公約に対し、それは難しいと論じられている。吉祥寺駅という重要な交通結節点で駅近に駐輪場を整備することと、たとえば東小金井の駅近に整備することとは、大違いである。吉祥寺は地域の拠点であり、駅の周辺には様々な既存の機能集積があり、新たな用地確保は簡単ではないし、受益者負担が最小限に抑えられているなかで、多大な買収費用と時間を費やしてまで、駐輪場を駅のすぐ近くに設けることは避けるべきである。
- したがって、当会としては、市長の公約に関係なく、市の職員や実務者のこれまでの検討や方針を支持したい。ただし、駐輪場の整備で終わるのではなく、利用状況や駐輪前後の自転車や徒歩によるトリップ状況をモニターし、駐輪場の今後のあり方を検討するための資料としつつ、さらに、駐輪場から吉祥寺駅や主要施設に至る歩道と周囲の景観、ベンチなどを整備と相まって、ウォーカブルな径路づくりに役立てることで、吉祥寺の魅力を一層高めるように活用していただきたい。

（2）本町コミュニティセンターの移転と施設複合化

- イーストエリアについては、今後の本町コミセンの移転により、さらにピンク街を抑制できる可能性が高く、その効果を強く期待するが、一方で健全な飲食等の夜間営業を抑制しすぎるのも街の魅力づくりとして問題となる可能性がある。吉祥寺北口においては、イーストとハモニカ横丁、ウェストにおける界隈性の違いについて検討し、商工関係者や市民参加も得て、吉祥寺のまちの一層の魅力づくりを進めていただきたい。

5― 吉祥寺パークエリアのまちづくり

（1）パークエリアのコンセプト

- 2023 年 3 月の「～吉祥寺パークエリアまちづくり 庁内プロジェクトからの提案～」レポートは、正直首をかしげる内容である。吉祥寺全体にとって、井の頭公園は最も重要な街の魅力を高める要素であり、したがって井の頭公園に接するパークエリアは“井の頭公園を感じさせる魅力や景観”を発揮すべきエリアである。
- したがってパークエリアは、吉祥寺駅南口に降り立った人々に井の頭公園の魅力素材である「水と緑」の趣を感じさせるべきエリアであり、まちづくりのコンセプトは、例えば「水と緑がにじむまち」とするなど、商業地域なりに様々な緑化や水景の演出を試みるべきエリアである。

- この場合、南町３丁目等の住宅地側はすでに緑豊かな住宅地が形成されているため、１丁目の商業地域であるパークエリアでは、すでに緑化の取り組みが進められているキラリナや南北通路脇、丸井の北側広場、LL ビーンのモミの木なども取り込みつつ、シンボルツリーや壁面緑化、人工地盤緑化等によって緑を取り込む努力を地道に進める、可能であれば小滝等の水景の演出も検討すべきと考える。
- 公共施設である公会堂についても、外構部の緑化や壁面緑化等を進め、井の頭公園の緑が吉祥寺駅までにじみ出ているイメージを形成するための一要素となることを期待したい。

（2）井の頭通りとパークロード

- 井の頭通りの現状は、通過車両に対して、ここが吉祥寺なのだというアイデンティティを感じさせることがないため、街路樹緑化が無理である以上、看板類の規制や外壁色彩の調和、壁面緑化の奨励等によって沿道景観の統一感の演出を検討すべきと言えよう。
- 南口駅前広場の整備のための地権者との合意の状況は、先行きが見えない状況にあると伝え聞く。それが事実であれば、令和５年２月の「吉祥寺駅南口、交通環境基本計画の策定に向けた考え方」にあるように、まず、吉祥寺大通りに井の頭通りのバス停を移設することの検討の深度化や、用地買収の必要性はあるものの、井の頭通りの活用や南側街区の活用の可能性も検討を深度化させてはどうか。
- パークロードについても、現状では駅裏の場末の飲食店街的なイメージから抜け切れていないことから、南口駅前広場の整備等によって歩行者用道路化が可能になった場合は、看板類の規制を進め、さらに街並みの統一を図る必要がある。

（3）武蔵野公会堂について

- 武蔵野市第六期長期計画・調整計画によれば、「武蔵野公会堂は設備の老朽化やバリアフリー化等の課題を抱えているため、令和４（2022）年度に策定した改修等基本計画に基づき、市民文化の拠点として再整備を行う」とある。しかし、市民文化の拠点となるためには、これまでの貸館中心の施設のあり方から脱却するため、施設の改修後は公会堂が市民文化・地域文化の拠点となるための効果的な事業を展開し、市民の文化創造活動を触発していくことが重要ではないか。
- 吉祥寺ないしは武蔵野市としての地域文化・市民文化の創造拠点となるために、地域づくりや生涯学習に関して実績の豊富な企業や NPO 等の力を導入し、そのための多様なプログラム（学習事業、文化事業、地域づくり事業、各種講座・イベントなど）を実施して、市民の文化創造活動を触発していく必要がある。そのためには、ハードな施設整備と並んでソフトな事業実施を効果的に展開する必要があるため、それに相応しい指定管理者等を入れていく必要がある。

以上

（作成者）　南　賢二（副代表）、田中　雅文（会員、武蔵野の森を育てる会代表）、
篠原 二三夫（理事長、とりまとめ責任者）

（連絡先）　〒180-0021　武蔵野市吉祥寺北町五丁目 4 番 2 号
理事長　篠原　二三夫、副代表　村井　寿夫
携帯電話：　080-3020-2995
E メール：　matimati-info@matimati.or.jp　(当会アドレス)
fshino@rc5.so-net.ne.jp　（篠原アドレス）